

『 On-line みんなで法華経を学ぼう! 』 vol.4

Jul.2022

— Let's embark on a journey to discover our own "perspective on the Lotus Sutra".
(みんなで“法華経観”を見つける旅に出よう)

『無量義経 十功德品 第三』 (流通分)

○『又如来の滅度の後に、若し人あって妙法華経の乃至一偈・一句を聞いて一念も随喜

せん者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』 (法師品 二〇二頁 終五行)

○『其の習学せざる者は 此れを曉了すること能わじ』 (方便品 八十二頁 四行)

○「習学」の3つのステップ「聞解・思惟・修習」

○『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくこと

を得たりと知れ』 (法師品 二〇九頁 三行)

○『十分の一でも実践できれば、いや、その一つにでも徹することができれば、
りっぱな精進といえる』 (『新釈法華三部経 第一巻』 P8・8行/P5・1行)



<説法品の復習>

『如来久しからずして當に般涅槃すべし』 (九頁 六行)

『應當に一切諸法は自ら本・來・今、性相空寂にして無大・無小・無生・無滅』

(十頁 五行)

・法とは 第一に〈ものごと〉。第二に〈真理〉。第三に〈仏教の教え〉。第四に〈善の実践〉。

・空寂 《空・くう》とは、すべてのものごとはその本質においては、平等である。

《寂・じゃく》とは、全てのものが生々発展しながらも、大きく調和する状態。

『虚妄に、是は此是は彼、是は得是は失と横計して、不善の念を起し衆の悪業を造って六趣に輪廻し、諸の苦毒を受けて、無量億劫自ら出ずること能わず』 (十頁 八行)

・六趣 (六道)

《地獄》「苦しみばかりがある境界」。カッカしている状態。

《餓鬼》「常に飢えと渴きを覚え、その満足を追ってあえぎ続けるが、決して満足することがないという境界」。ガツガツしている状態。

《畜生》「人間以外の動物の境界」。フウフウ不平を言う状態。

《修羅》「いつも戦いばかりを続けている凄惨な境界」。イライラしている状態。
《人間》「普通の人間の境界」。反省懺悔できる心を持つ。フワフワしている状態。
《天上》「苦しみがなく、喜びに満ちた境界」。ルンルンの状態。

どうすれば六道の輪廻(りんね)を解脱(げだつ)することができるのかといえ、よい教を聞き、心を清らかにし、行いを正しくするほかはありません。

※反省をすることができる「人間界」からのみ、「四聖(界)・ししょう、しせい」へ行けない。

(「四聖」とは、声聞、縁覚、菩薩、仏)

『憐愍の心を生じ大慈悲を發して將に救拔せんと欲し、』 (十頁 終二行)

・四相 【生・住・異・滅】

『菩薩是の如く四相の始末を觀察して ~ 一切の諸法は念念に住せず新新に消滅すと觀じ、復即時に生・住・異・滅すと觀ぜよ』 (十一頁 三行)

『性欲無量なるが故に説法無量なり。説法無量なるが故に義も亦無量なり』(十一頁 六行)

『無量義とは一法より生ず。其の一法とは即ち無相なり。是の如き無相は相なく、相ならず、相ならずして相なきを名づけて實相とす』 (十一頁 七行)

『是の如き眞實の相に安住し已って發する所の慈悲、明諦にして虚しからず』

(十一頁 終四行)

眞實の相(すがた)を悟り、その悟りがすっかり身につけてしまった時に起こってくる「慈悲心」というものは、はっきりした根拠の上に立った(「智慧」に基づいた慈悲心ですので一明諦(みょうたい)でありますから、そのはたらきは、必ず立派な結果となって現われるものです。 (P257・6行/P184・1行)

『善男子、是の如き甚深無上大乗無量義經は、文理眞正に尊にして過上なし。三世の諸佛の共に守護したもう所なり』 (十二頁 一行)

『一切の邪見生死に壞敗せられず』 (十二頁 三行)

・菩薩の十地

(P276・終3行/P198・終4行)

・四十余年 未顯眞實

(P294・3行/P211・終行)

ご入滅の近づいたことをも自覚されましたので、いよいよ法の眞實のすべて、究極の眞理をお説きになるわけです。

『種種に法を説くこと方便力を以てす。四十餘年には未だ眞實を顯さず』(十四頁 二行)

・歴劫修行と即身成仏

(P311・終5行/P226・1行)

『能く一身を以て百千萬億那由他無量無數恒河沙の身を示し ~ 』(十六頁 終三行)



<十功德品のあらすじ>

【大莊嚴菩薩の感動と教えの讚歎】——

【十九頁 四行】『無量義の教え』を聞いて心から感動した大莊嚴菩薩(だいしょうごん ぼさつ)は、仏さまに感激と御礼を申し上げます。

「世尊。よくぞこの奥深い大乘の教えである『無量義經』をお説きくださいました。／(『眞實(しんじつ) 甚深(じんじん) 甚深甚深なり』) この教えは誠に絶対眞實の教えであり、こ

の上もなく尊く、深遠な教えであります。なぜならば、この法を聴聞した出家・在家の修行者をはじめ鬼神、国王やその家来、一般の人々、そして菩薩に至る全ての者たちは、極めて高い信仰の境地を得ることができました。そして、無上の悟りを求める心を起こさない者は一人としていませんでした。この教えは真実であって正しく、これ以上尊いものは他にはありません。そして、過去・現在・未来の三世の諸仏がお守りくださるものであります。／（『衆魔群道（しゅまぐんどう）、得入（とくにゅう）することあることなし』）そしてどんな妨害や間違った考え、その他の様々な教えも、この教えを侵すことはできません。／（『一切の邪見（じやくけん）生死（しやうじ）に壊敗（えはい）せられず』）この教えは一切の誤った考えや、人生途上におけるどんな『出来事』、この世の一切の『変化』にも動揺し、打ち負かされることはありません。なぜなら、／（『一（ひと）たび聞けば能（よ）く一切の法を持（たも）つが故に』）この教えをひとたび聞けば、この世のすべての出来事・ありようが完璧に分かり、どんな場合にも正しく対応することができるようになるからです」

【教えを聞いた者と聞かなかった者との功德の違い】——

【二十頁二行】（『若（も）し能（よ）く修行すれば必ず疾（と）く無上菩提を成ずることを得（い）ればなり』）「この教えを聞けば、即座に大きな功德を得ることができ、教え通り修行すれば、真っすぐに仏の悟りを得ること出来るようになります。反対にこの教えを聞くことが出来ないと、大きな利益（りやく）を失うことになります。その人は無限の時間をかけても、ついに仏の悟りを得ることは出来ません。／（『險徑（けんきやう）を行くに留難（るなん）多きが故に』）そればかりか、人生の大きなまわり道をする事になり、険しい苦難の道をさまようことになります。ですから世尊よ、どうか私たちを憐れとお考えくださり、この奥深い教えが広く人々のなかに留まるよう、この教えの『実践』の面から具体的にお教え下さい」

【大莊嚴菩薩の質問／（教えを実践するにあたっての質問）】——

【二十頁八行】 大莊嚴菩薩は続けて質問をします。
「世尊。お伺いしたいことがあります。／（『是（こ）の經典は何（いず）れの處（ところ）よりか來（きた）り、去（い）って何（いず）れの所（ところ）にか至（いた）り、住（とどま）って何（いず）れの所（ところ）にか住（す）む』）この教えは一体『どこから来たもの』であり（①教えの『大本・源』とは？）、そして『どこへ向かうための教え』『何を目的とした教え』でしょうか（②教えの『目的』は？）。また、この教えは『どこに留まるもの』であり、『どのような者が教え理解できるのか』（③教えを『護持できる者は誰』？）。この三つのことをお教えてください」

【世尊の答え／（教えを実践する功德について）】——

【二十頁終二行】すると世尊は大変お喜びになり、お答えくださいました。
「よろしい、大莊嚴菩薩よ。そなたの言う通りこの教えはこの上もなく尊く深遠なるものです。／（『我是（こ）の經を説くこと甚深（じんじん）甚深眞實（しんじつ）甚深なり』）私がこの教えを説く理由は、私の深い、深い心から出ているものです。なぜこの教えを説くのかと言えば、この教えは人々を直接、仏の悟りへと導くものだからです。そして、この教えを一度聞けば、あらゆる物事を正しく、的確に判断することができます。

あなたはこの教えの『①大本・②目的・③誰が、この教えを護持するのか』についての質問をしましたが、それについて答えましょう」

【二十一頁 四行】「いいですか、よく聞くのですよ。①（『諸佛(しょぶつ)の室宅(しつたく)の中(うち)より來(きた)り』) この教えの『大本』は、『諸仏の本心・諸仏の本願』からあらわれたもので、それは《真実の慈悲》から生じたものであり、②（『去って一切衆生の發菩提心(ほつぼだいしん)に至り』) 教えの『目的』は、一切衆生に『最高無上の悟りを求める心を起こさしめる』《最高の智慧を得る》ために説かれたものであり、③（『諸(もろもろ)の菩薩所行(しよぎょう)の處(ところ)に住(じゅう)す』) 『誰が教えを護持するのか』は、それは人が『菩薩行を實踐する』所に存在するもので、《たゆみない實踐の中で、その真価を發揮》するのであります。しかもそればかりではありません。この教えを實踐すると、甚大な『十の功德』があります。大莊嚴よ、この『十の功德』を聞きたいとは思いませんか」

【二十一頁 終三行】大莊嚴菩薩(だいしょうごん ぼさつ)は、即座に申し上げました。
「世尊よ。どうぞその『十の功德』についてお教え下さい」

【第一の功德】／『四無量心』と『六波羅蜜』を修し、自他一体となっていく……

【二十一頁 終三行】世尊はお答えになりました。

「もしある人がこの『無量義』の教えを聞いて、一行でも一句でも理解したならば、次のような功德を得ることができます」

「まず『第一の功德』とは、／（『未(いま)だ發心(ほっしん)せざる者をして菩提心を發(おこ)さしめ』) だれもが仏を目指すという『發菩提心』を起こします。そしてあらゆる人と自他一体になることができ、『四無量心(慈悲喜捨)』の徳目を具え、大慈悲心を起こすことができます。そしてそればかりか、人を妬(ねた)む心や物事にとらわれる愛着の心を無くし、さらには何よりも『六波羅蜜』の徳行を修めることができます。／（『未(いま)だ彼(かれ)を度(わた)すこと能(あた)わざる者には彼を度(わた)す心を起さしめ』) さらには、自分だけではなく他の人々と共に救われなければ、『本当の幸せはない』ということが判り、ひとりでに他を救おうという心が自然と湧き起こります。殺生・妄語・邪淫などの悪行は全て無くなり、現象の変化に惑わされず、仏道精進が後戻りすることが無くなり、煩惱を無くそうという心が、これもまた自然と起きるようになります」

【第二の功德】／ 教えを少し聞いただけで、全ての仏の教えが理解できる……

【二十二頁 終三行】『第二の功德』は、この教えのほんの一部だけを聞いたとしても、／（『則(すなわ)ち能(よ)く百千億の義に通達(つうだつ)して、無量數劫(むりょうしゅこく)にも受持する所の法を演説すること能(あた)わじ』) ただそれだけで、『数えきれない、仏の全ての教えの内容に通ずる』ことができます。したがって、その人が会得した教えを説こうとするならば、無限の時間を費やしても説き尽くすことが出来ません。なぜならこの『無量義の教え』は、あまりにも深遠であるからです。／（『是(こ)の經は、譬(たと)えば一の種子より百千萬を生じ、百千萬の中より一一に復(また)百千萬數(まんじゅ)を生じ』) たとえて言うならば一つの種子から多くの実がなり、そして最終的に限りない種が生じるよう、この『無量義の教え』はこれをもととして数限りない教えの内容が生まれ出て来るので

す。だから『無量義』と名づけたのであります」

【第三の功德】 / 煩悩があっても煩悩が無いと同じになり、人生の「変化」に負けない……

【二十三頁 七行】『**第三の功德**』は、 / (『煩悩(ぼんのう) ありと雖(いえど) も煩悩なきが如く、生死(しょうじ) に出入(しゅつにゅう) すれども怖畏(ふい) の想(おもい) なけん』) まだ心の底に『煩悩』が残っていても、全く煩悩がないのと同じようになり、人生におけるどんな『変化』にあおうとも、動揺し、引きずり込まれ、恐れたり、悩み苦しむようなことはありません。そして、煩悩に苦しむ全ての人に『救いの手』を差し伸べる心が生まれ、 / (『一切の法に於て勇健(ゆうこん) の想(おもい) を得ん』) どんな困難をも乗り切る『勇気と力』を得ることができます。 / (『衆生を擔負(たんぷ) して生死(しょうじ) の道(どう) 出(いだ) す』) 人々を担(かつ) ぎ出して人生苦から運び出し、 / (『未(いま) だ自ら度(あた) わざれども、已(すで) に能(よ) く彼(かれ) を度(あた) せん』) たとえ自分は悟っていないくても、他の人を悟りへと導くことが出来るようになります。それは、渡し守(わたしもり) の船頭が病気で船を操作することができなくても、船がしっかりしていて道具も揃(そろ) い、その道具の使い方を教えていれば、誰でも人を向こう岸へ渡らせることができるように、『無量義』の教え通りに行うならば、 / (『生死(しょうじ) を度(あた) することを得(い) るなり』) 人々を様々な人生の『変化』による苦しみから救い出すことができるようになります」

【第四の功德】 / 菩薩たちと仲間になり、仏から手厚く守護される……

【二十四頁 終四行】『**第四の功德**』は、この教えを一句でも聞けば、悟りを得るためのあらゆる困難にも負けない強い心が生じ、まだ悟っていないくても、他の人を救えるようになります。 / (『諸(もろもろ) の菩薩と以て眷屬(けんぞく) と爲(なり)、諸佛如来、常に是(こ) の人に向(むか) って而(しか) も演説したまわん』) その人は多くの菩薩の仲間となり、いつも仏がその人に向き合っ、一対一で法を説いてくださいます。そして教えを聞くと、すっかり身に具えることができ、教え通りに実践をして、行動に誤りがありません。さらに多くの人に法を説き、 / (『宜(よろ) しきに隨(したが) って廣く説かん』) 相手の機根に応じて的確に法を説くことができるようになります。

【二十五頁 二行】この人は、例えば、王家に生まれた王子が、多くの愛情を受けて育ち、幼いながらも他国の王族と対等に付き合うことが出来る王子に育ち、国王と王妃が常にそばにいて王子を守ってくれているように、教えを実践する人のそばには、いつも仏がついていて守ってくれます。そしてこの人が法を説くならば、 / (『已(すで) に一切の四衆・八部に宗(たつと) み仰(た) ぐれ、諸(もろもろ) の大菩薩を以て眷屬(けんぞく) とせん。～ 演説する所達(とこらたご) うことなく失(とが) なく、』) 人間のみならず仏法を守護する諸天善神からも敬われるようになり、大菩薩の仲間入りを果たすことができます。そして、真実を誤らずに説くことが出来、 / (『常に諸佛に護念し慈愛偏(ひとえ) に覆(おほ) れん』) いつも諸仏から深い慈悲を受けて、親が子を守るように手厚く守護されます」

【第五の功德】 / 大菩薩と同じ行動ができ、一日の精進が何万年分の精進と同じになる……

【二十六頁 四行】『**第五の功德**』は、 / (『未(いま) だ諸(もろもろ) の凡夫の事(じ) を遠離(おんり) する』)

こと能(あた)わずと雖(いえど)も、而(しか)も能(よ)く大菩薩の道(どう)を示現(じげん)し』) まだ『煩惱』が残り、凡夫の境界にいても、大菩薩と同じ尊い結果現象を現わすことが出来、 / (『一日を演(の)べて以て百劫と爲(な)し、百劫を亦能(またよ)く促(ちぢ)めて一日と爲(な)して』) 一日の精進が何万年分の修行に値するようになります。また何万年分の修行の成果が、その人の一日の精進で悟りを得ることが出来るようになります。ですからその人が説く法を聞くと、多くの人々は『仏法を聞く喜び』をすぐさま得られるようになります。たとえその人が凡夫の身であっても、変わりはありません。それは生後7日目の龍の子であっても、ちゃんと雲を起こし、雨を降らせることができるのと同じであります」

【第六の功德】 / 人生苦を断ち切れ、尊い境地に至ってなくても人を幸せに導ける……

【二十六頁 終行】『第六の功德』は、 / (『煩惱(ぼんのう)を具(ぐ)せりと雖(いえど)も～ 煩惱(ぼんのう)生死(しょうじ)を遠離し一切の苦を断(だん)ずることを得せしめん』) その人が煩惱を持つ身であっても、その人が衆生のために法を説くと、多くの人々を、煩惱による苦や変化に動揺する『凡夫の境地』から離れさせ、『人生苦』を断ち切ることが出来るようになります。そしてその人自身も仏と同じ悟りの境地に達することができます。それはあたかも、王子が幼い時、大王が不在または病弱であっても、王子が大王の言いつけの通りに政(まつりごと)を行えば、国全体が自然と治まっていくのと同じです。その人が菩薩の境地に至っていなくても、その人が説いた教えを実践していくと、世の多くの人々は煩惱を除き去り、菩薩の道を得ることが出来るようになります。」

【第七の功德】 / 日々の行動が自然と『六波羅蜜』の通りになり、人生苦から解放……

【二十八頁 一行】『第七の功德』は、その人が仏の教えを聞いて喜びを覚え、さらに仏の教えを強く求める心を起こしたならば、『五種法師の行』を修することができ、その結果、最高の悟りを求める決意を立てるようになります。そして様々な善行を行うようになり、そればかりか人の不幸を取り除き、苦しみ悩む全ての人を救う願いを持つようになります。その人は未だ六波羅蜜を完全に修めていなくても、 / (『六波羅蜜自然(じねん)に在前(ざいぜん)し、即(すなわ)ち是(こ)の身に於て、無生法忍(むしょうぼうにん)を得、生死(しょうじ)・煩惱(ぼんのう)一時に断(だん)ずる』) 自然と『六波羅蜜』を完成したようになります。そして、娑婆世界に生きる凡夫の身でありながらも、目の前の現象に引きずられて苦しむことはなくなり、煩惱を断つことが出来るようになります。さらに菩薩の高い境地を得ることができ、それによって多くの人々と『自他一体』になる境地を得ます。譬(たと)えば、全ての敵をことごとく打ち払った最高の勇士に対して、国王は大いに喜び、国土の半分の領地を褒美として与えるのと同じで、教えの実践者は自然と『六波羅蜜』を身につけることができ、しかも成仏するための半分の功德にあたる『無生法忍・むしょうぼうにん』(現象に惑わされない超越した境地)という境地を自得するようになります。そして結果的に、悟りを得る(領地を与えられる)ことになり、安楽に過ごすことができるようになります」

【第八の功德】 / 經典の力(經力)を得て、たちまちにして人々を幸せにする……

【二十九頁 一行】『**第八の功德**』は、その人は『**經典**』を**仏の身と同じように敬うようになります**。教えを心から愛し、『**五種法師**』や『**六波羅蜜**』の徳行を行うようになり、無量義の教えを多くの人々に説くようになるでしょう。そして經典の力によって、／（『**都**（す）べて罪福あることを信ぜざる者には、是（こ）の經を以て之（これ）を示して～**信ぜしめん**』）**教えを信じきれない者に、信仰心を引き起こさせ、**／（『**經の威力**（いりき）を以ての故に、其（そ）の人の信心を發（おこ）し歎然（こつねん）として回（え）することを得ん』）**經典の力で、その人の心を、たちまちにして仏道へと振り向けさせます。**／（『**男子**（なんし）・**女人**（すなわ）ち是（こ）の身に於て無生法忍（むしょうぼうにん）を得（え）』）そして娑婆世界に生きる凡夫の身でありながらも、どんな現象の変化にも動揺しない安穩の境地を得ます。そればかりか多くの菩薩の仲間入りを果たし、多くの人々の人格を完成させ、／（『**速**（すみや）かに能（よ）く衆生を成就し佛國土を淨（きよ）め』）この世の中を清らかにして行きます。そして、さほど長い年月をかけずして、最高の仏の境地に達することができるでしょう」

【第九の功德】 / 「宿業余罪」を滅し、自分の分身が誕生して人々の苦を救う……

【三十頁 二行】『**第九の功德**』は、この教えに触れて心が躍動し、大きな感動を覚えて『**五種法師の行**』を行うようになります。

【三十頁 四行】（『**廣**（ひろ）く衆人（しゆにん）の爲に是（こ）の經の義を分別し解説（げせつ）せん者は、即（すなわ）ち宿業の餘罪（よざい）重障（じゅうしょう）、一時（いちじ）に滅盡（めつじん）することを得（え）』）そして、**人々に法を説き、教えの内容をかみくだいて解説してあげたならば、その人は、長い長い過去世から積み重ねて来た『悪業』（宿業）を、一瞬にして滅し（宿業余罪滅尽）、速やかに清らかな身となります。**しかもどんな人に対しても仏の道に導くことの出来る教化力を身につけ、仏と菩薩だけが達することのできる『**首楞嚴三昧**（しゅりょうごんざんまい）』という境地を得ることが出来ます。そして悪をとどめ、善を保つ力を具えます。そして常に精進して菩薩の境界に登り詰め、ここに居ながらにして、／（『**善**（よ）く分身散體（ふんじんさんたい）して十方の國土に遍（へん）じ』）あらゆるところに自分の分身を派遣できるようになります。つまり、**自分の精神を受け継ぐ人々を、さまざまなところに誕生させ、あらゆる人を教化し、すべての人の苦を救うようになります**」

【第十の功德】 / 凡夫の身であっても、菩薩の「最高の境地」に達する……

【三十頁 終二行】『**第十の功德**』は、自ら『**五種法師の行**』を行うばかりでなく、**他の人々に『五種法師の行』を行わせるようになり、その功德によって自らが仏の悟りを得るよう**になります。そしてまだ凡夫の身でありながら、一切の人々を救う誓いを立て、／（『**廣**（ひろ）く能（よ）く衆（もろもろ）の苦を抜き、厚く善根を集めて一切を饒益（にょうやく）せん』）**人々の苦を抜き去り、一切の利益（りやく）を与えることができるようになります。**／（『**法**（うらおい）の澤（うらおい）を演（の）べて洪（おおい）に枯涸（こかく）に潤（うるお）し』）それはあたかも、渴ききった人々の心を水で潤すように、また、薬によって人々の心の病を治すように、教えによって人々を救い出すようになります。つまりその人は、**菩薩の最高の境地**である一切の人々を救う『**法雲地・ほううんぢ**（菩薩の十地）の**第十地**』の境地に達することができるのです。この人は、全ての人々を慈しみの心で包み込み、／（『**苦**（く）の衆生を攝（せつ）し

て道跡(どうしゃく)に入(い)らしめん』人生苦に喘ぐ人々を、仏の足跡(仏の道)に導き、その功德によって、さほど長い年月をかけずに仏の悟りを得ることができます」

【無量義経の十功德の「かみしめ」を伺った大莊嚴菩薩の「歡喜と感謝」】——

【三十二頁 一行】「以上が、『無量義の教え』を受持した人が得る『十の功德』です。

このように、この教えは／(『極めて大威神(だいゐじん)の力(ちから)をましまして、尊(そん)にして過上(かじょう)なし』)極めて大きな力を持ち、この上なく尊い教えであります。そしてどんな人でも素晴らしい信仰の境地へ至らしめ、人生のあらゆる変化にも揺るがされず、何ごとにもとらわれない『自由自在』の心に導くものです。それゆえ『無量義』と名づけられたのです。そして全ての人が菩薩行を実践するように導くことができ、／(『功德の樹をして鬱茂(うつむ)扶蔬増長(ふそぞうちょう)せしめたもう』)それによって功德の樹木が生い茂るように伸び、広がって行きます。これがこの教えの不可思議な功德力であります」

【無量義経の十功德を伺った大莊嚴菩薩の「歡喜・感謝・讚嘆」】——

【三十二頁 六行】その時、大莊嚴菩薩(だいしょうごん ぼさつ)及び八万の菩薩たちが、口をそろえて世尊に申し上げました。

「世尊よ。世尊がお説きになった、深淵(しんえん)な教えである『無量義経』は、／(『文理真正(もんりしんしやう)に尊(そん)にして過上(かじょう)なし』)この上な尊く、真実そのものです。／(『三世(さんぜ)の諸佛(しよぶつ)の共に守護(しよご)したもう所(ところ)』)ですから、この教えの通り修行している限り、三世(過去・現在・未来)の諸仏(しよぶつ)が守護(しよご)してくださり、／(『衆魔群道(しゆまぐんどう)、得入(とくにゅう)することあることなく、一切(いっけつ)の邪見(じゃけん)生死(しやうじ)に壞敗(えはい)せられず』) どのような邪魔(じゃま)ものにも妨害(ぼうがい)されることはなく、間違(まちが)った考えや、人生(じんせい)の様々な『変化(へんげ)』に遭遇(そうぐう)しても動揺(どうご)し、挫(くじ)け、打ち負(うちま)かされることはありません。

【三十二頁 終四行】この教えに十の不可思議な功德があることも、よく解らせていただきました。この教えはあらゆる人々に余すところなく利益(りやく)を与え、素晴らしい境地に至らしめるものです。尊いみ教えをいただき、こんな有難い経験をしたことはこれまでにございません。尊く素晴らしい教えをお説きくださった世尊の深いお慈悲に、私どもはどのようにしてお報いしてよいかわからないくらい、深く感謝申し上げます。／(『世尊(よじん)の慈恩實(じおんじつ)に報(ほう)すべきこと難(かた)し』)誠に世尊は、廣大無辺(くわんだいむへん)な慈恩(じおん)のお方であられます」

【無量義経が説かれたことで、全宇宙の全生命が「感動と感謝」、そして「奇瑞」】——

【三十三頁 三行】以上、讚嘆と感謝の言葉を大莊嚴菩薩(だいしょうごん ぼさつ)たちが申し述べると、／(『爾(その)時に三千大千世界(さんぜんたいせんせかい)六種(りくしゆ)に震動(しんどう)し』)世界中が感動のあまり打ち震い、空からたくさんの美しい花びらが舞い降り、芳しい香りと様々な宝物(たからもの)が仏(ぶつ)および教えを聴聞(しんもん)している菩薩(ぼさつ)をはじめとする多くの人々に降り注(つ)がれました。

すると東方(とうほう)の世界(せかい)のみならず、あらゆる十方(じゅうぱう)世界(せかい)・宇宙(うちゅう)全体(ぜんたい)にある無数(むすう)の仏(ぶつ)の世界(せかい)でも、同様の現象(げんじょう)が起こり、仏(ぶつ)と菩薩(ぼさつ)と大衆(たいしゆ)が供養(くじやう)されるのであります。

【世尊が無量義の教えを広めることを付属(託す)】——

【三十四頁 一行】その時、世尊は、大莊嚴菩薩をはじめとする多くの菩薩たちにお告げになりました。

「そなたたちは、この教えを深く信じ、敬い、／（『廣(ひろ)く一切を化(け)して勤心(ごんしん)に流布(りゅうふ)すべし。～ 諸(もろもろ)の衆生(しゆじやう)をして各(おのおの)法利(ほうり)を獲(え)せしむべし』）心を尽くして一切の人々を教化しなければなりません。／（『汝等(なんだち)、眞(しん)に是(こ)れ大慈大悲(だいじだいひ)なり』）その行いこそが『眞の大慈大悲』なのです。この教えを弘めることで、みなさんは『五種法師の行』をつとめられるようになり、真っ直ぐに仏の悟りを得ることができるようになるのです」

【世尊の付属を受けて、大莊嚴菩薩が弘法(ぐほう)を決意】——

【三十四頁 八行】すると大莊嚴菩薩と八万の菩薩たちは一斉に立ち上がり、世尊の御前に進み出て、み足に額をつけて礼拝し、『帰依』の誠を捧げて申し上げました。

「世尊よ。私共に大きなお慈悲をおかけくださったことを、心から感謝申し上げます。／（『敬(やっし)んで佛勅(ぶつちやく)を受けて、如來(にょらい)の滅後(めつご)に於て當(まさ)に廣(ひろ)く是(こ)の經典(きんげん)を流布(りゅうふ)せしめ』）私たちは、『法を弘めよ。それこそが大慈大悲』という仏さまのお言いつけを謹んでお受けし、仏さまがお亡くなられた後も、しっかりとこの教えを弘め、あまねく人々がこの教えを信じ、読誦・書写・供養できるように法を弘めます」と決意を申し上げました。

【大莊嚴菩薩の決意を受け、世尊の悦び、そして大莊嚴菩薩への励まし】——

【三十五頁 三行】それをお聞きになった仏さまは心から喜ばれ、「よろしい。大変結構です。／（『汝等(なんだち)今者(いま)眞(しん)に是(こ)れ佛子(ぶつし)なり』）お前たちは今こそ、ほんとうに『仏の子』です。そなた達こそ、大きな『慈悲の心』をもって、人々の苦しみを救い、一切の人々の幸福を生み出す力となり、素晴らしい導師であり、心の支え、依り所となる人です。どうかこの教えの利益(りやく)を、常に広く人々に与えてあげて下さい」

【一同、歡喜。弘法(ぐほう)の決意を固めて、布教の道へ】——

【三十五頁 終二行】この仏さまのお言葉を受けて、／（『皆(みな)大いに歡喜(かんぎ)して、佛(ぶつ)の爲(ため)に禮(らい)を作(な)し、受持(じゆぢ)して去(さ)りにき』）一同は『大歡喜』し、仏さまに礼拝をして、そして教えをしっかりと胸に刻んで受持し、法会(ほうえ)の席を立てて行きました。



(P335・1行/P245・1行)

この品(十功德品)には、このお経に説かれた教えを理解し、実践すれば、どのような精神的な功德があるか、どのような善い行いができるか、どのように世のためひとのために役立つことができるかということが、くわしく徹底的に説かれてあります。

るつうぶん 流通分の重要さ

(P335・5行/P245・5行)

われわれ凡夫は尊い教えを聞くとその当座は、なるほどと深く感銘します。その教えを實踐してゆきたいという気持ちにもなります。しかし、よほどの人でない限りその気持ちはしっかりと固まったものではなく、何か周辺に面白くない変化が起こると、つい教えられたことを忘れて、怒ったり、驚いたり、悲しんだり、悩んだりしがちです。ですから、われわれ凡夫は、教えを聞いたらどんなことがあっても、教えを放さないという決定(けつじょう)を起こさなければなりません。そのためには、この教えにつかまっておれば、どんなことがあっても大丈夫だ！ という確信がなければなりません。その確信を心に植え付けるために説かれるのが〈流通分〉です

『當に知るべし、此の法は文理真正なり、尊にして過上なし。三世の諸佛の守護した

もう所なり。衆魔群道、得入することあることなし。一切の邪見生死に壊敗せられず。所以は何ん、一たび聞けば能く一切の法を持つが故に』(十九頁 終三行)

かんきょう 心が環境を変える

(P339・終5行/P248・終2行)

われわれの人生途上にはさまざまな変化が起こります。真実の教えを知らない者は、その千差万別の現象・変化に引きずり回されて、心の安まりはありません。(中略) 環境にどのような変化が起ころうとも究極の真理(本仏)に生かされているのだという安心感をもって悠々(ゆうゆう)としておれば、どのようなことが起こっても動ぜずに適切な判断にしたがって行動できますから、境遇は必ず好転するようになるのです。(中略) この世のすべては仏教の根本の教えである縁起の法則が説き示しているように、因と縁の和合によって変化していくものなのです。ですから自分がどのような因となり、縁となっていくかによって、自分をとりまく環境はどのようにでもかわるのです。つまり、私たちは仏さまの「智慧・慈悲」を身につけて、千変万化する現象もすべて自分がその因となり縁となっているのだから、自分が良い方向に行くことを念じ、努力を続けていけば必ず物事は良くなっていくのだと確信し、行動することが第一なのです。(中略) まさしく三界は唯心の所現なのです。

それを困難なことに出会うと、すぐに難しいことだからこそ、環境を変えることなど不可能だとあきらめてしまうのは、われわれが小さな我にとらわれているからにほかならないのです。(中略) もしわれわれが本当に仏さまと相通ずる心を持つことができ、仏さまのお心の如くに行動することができるようになれば、その程度に應じて、確かに環境を変えることができるのです。

《^{しゆい}思惟のひととき ①》

〈三界は唯心の所現〉。「どんな困難にあっても①『自分がどのような因となり、縁となっていくか』、②『仏さまと相通ずる心をもつことができ、仏さまのお心の如くに行動することができる』ようになれば、環境を変えることができる」と開祖さまは説かれています。—— あなたはこのご指導をどのように受け止めますか？

『若し能く修行すれば必ず疾く無上菩提を成ずることを得ればなり。…所以は何ん、菩提の大直道を知らざるが故に、險徑を行くに留難多きが故に。世尊、是の經典は不可思議なり』 (二十頁 二行)

『善男子、是の經は本諸佛の室宅の中より夾り、去って一切衆生の發菩提心に至り、諸の菩薩所行の處に住す』 (二十一頁 五行)

【是の經は本】とは

(P353・1行/P259・7行～)

「諸仏の室宅」の中より夾り — 諸仏の心の奥。すべての生命を本来の使命どおりに生かしたいという〈諸仏の本願・真の慈悲〉。

衆生の「發菩提心」に至り — 目的⇒全ての人が仏の智慧を得たいという心を起こさせる。

菩薩所行の處に住す — 真価⇒この教えはどこにおれば真価を發するの？ それは〈菩薩行実践の中〉にあるのです。実践してこそ、この教えは生命を發現するのです。

【第一の功德】——

(P364・終4行/P269・終4行～)

〈慈心〉 — 自他一体になると、他者の幸せを願わずにはおれない。

《^{しゆい}思惟のひととき ②》

〈慈心〉—「自他一体になると、他者の幸せを願わずにはおれない」とは、自分に(自分の生活に)置き換えると、どういうことを言うのでしょうか？ 逆に、自他一体とならなければ、他者(相手)の幸せを願わなくなるのでしょうか？
自他一体になることの大切さについて、少し考えてみましょう。

〈大悲〉—自他一体でないと〈殺戮〉を好む。自他一体は悲の心(救いたい心)を生ず。

〈隨喜〉— 真理をつかんだ喜び。〈嫉妬〉は自身の進歩を妨げ、人の心を暗くする。

自分をも^{きゃっかんし}客観視する

(P369・2行/P272・3行)

閉じこもっている自分という城から出て、ひろびろとした目で、自分をも他人をもひっくるめて眺(なが)めてみる・・・これを客観視するというのですが・・・～とにかく、主観という殻の中から出て、物事を客観視することが、人間が本当の智慧を得る最大の方法であって、そういう智慧の徹底したもの、最高無上のものが〈仏の智慧〉である

といていいでしょう。～ 差別相を明らかに見分けると同時に、その平等相をもきちん
と見とどける。これが〈仏の智慧〉であり〈仏知見〉です。

《^{しゆい}慧惟のひととき ③》

「とにかく、主観(自分の見方)という殻の中から出て、物事を客観視(自分の見方から離れて、全体を見よう)することが、本当の『智慧』を得る最大の方法である」と開祖さまはお説きになられています。—— このことを自分に(自分の生活に)置き換えると、どうい
うことを言うのでしょうか? 少し考えてみましょう。

〈能捨〉— 捨てるのが正しい時、全体のためになる時、喜んで捨てる心境。

^{あいじゃく}愛著^{のうしや}には^{こころ}能捨の心

(P372・3行/P274・3行)

もし、大きな目で見、捨てるのが正しいと判断される時は、いつでも捨てていい —
という心境に達すれば、心が自由自在になって、とらわれることがない～ いずれにし
ても — 捨てるのが正しい時、あるいは捨てるのが全体のためになる時は、喜んで捨
てる — という淡々たる心境、これを〈能捨(のうしや)の心〉といい、～ ほんとうの幸せを得
ると同時に、社会にも幸せをもたらす人なのであります。

《^{しゆい}慧惟のひととき ④》

「捨てるのが正しい時、捨てるのが全体のためになる時、喜んで捨てる」とは、
どういうことを言うのでしょうか? 考えてみましょう。
(例:この場で自分の『怒り』を捨てれば、全体のため、みんなのためになる)

- 〈布施〉— 自他一体になると物欲が薄れ、他者に尽くす〈布施〉の心になれる。
〈持戒〉— 自他一体でない〈憍慢〉になる。常に謙虚な気持ちでいることが大切。
〈忍辱〉— 自他一体でない〈瞋恚〉になる。他人に対してむやみに腹が立つ。人間す
べて平等と悟れば〈忍辱〉の心が成就される。
〈精進〉— 自分に与えられた使命を100%果たすことが、世の中全体の調和であり、
仏の世界(寂光土)と一致することが解る。自他一体が解る。
〈禅定〉— 全ての物事は本来差別がなく、もともと平等を知っていれば、目前の変化に
慌てることがない。自他一体が解ると〈禅定〉でいることができる。
〈智慧〉— 自他一体で見る。本能のままに生きることを無明と言い、智慧が無い状態。

^{ぐち}愚痴^{ちえ}には^{こころ}智慧の心

(P386・1行/P283・5行)

^{にんげん}人間^{ちえ}としての知恵

(P386・4行/P283・7行)

本能による知恵であって、①〈自分の生命を守りたい〉という意志と②〈自分の種族
を殖(ふ)やしたい〉という意志、～ どんなに利口そうに見えても、その生活活動のす
べてはこの二つの本能から出ているのです。

《^{しゆい}思惟のひととき ⑤》

『知恵』は、人間の本能によるもので、①〈自分の生命を守りたい〉という意志。言い方を変えると「自分の立場を守りたい」ということ。②〈自分の種族を殖(ふ)やしたい〉という意志、これは、「自分の意見を通したい。反映させたい」という意味につながります。かたや『智慧』は、真理に基づく『智慧』で、仏道修行者が求めるものであります。この『智慧』と『知恵』の違いを、あなたはどうか受け止めますか。ちょっと考えてみましょう。

『未だ彼を度すること能わざる者には彼を度する心を起さしめ』 (二二頁 五行)

みんながいっしょに救われ、この世の全体が平和にならないと、ほんとうの幸福はやってこないのだということを、心の底から感じるようになります。そこで、一人でも多くの人を導いて、救ってあげなければ・・・という、やむにやまれぬ気持ちが生じてくるのです。 (P389・3行/P285・6行)

※世界ぜんたい幸福にならないうちは、個人の幸福はあり得ない。 (宮沢賢治)

個人(=individual)、つまり、分ける(=divide)ことのできない最小単位。

《^{しゆい}思惟のひととき ⑥》

『未だ彼を度すること能わざる者には彼を度する心を起さしめ』

『無量義経』を実践すると、「みんながいっしょに救われ、この世の全体が平和にならないと、ほんとうの幸福はやってこない」という心が自然と湧き出してくる。と説かれています。

宮沢賢治の言葉である『世界ぜんたい幸福にならないうちは、個人の幸福はあり得ない』という心が自然と湧き出してくるというこの経文、宮沢賢治のこの言葉の両方を、少し味わってみましょう。

ごう じかいきよう
業の自壊作用

(P406・終4行/P297・3行)

仮に一つの不幸が現れたら、自分が負っていた業が一つ消えてしまったことになる。

〈彼を度する 利他〉 — 自他一体だと、自分だけ救われても真の幸せはないと感ずる。

〈十善〉 — 自他一体だと〈十悪〉の心が無い。

殺生/偷盗/邪淫/妄語/綺語/両舌/悪口/貪欲/瞋恚/愚痴。

〈無漏〉 — 〈漏〉とは煩惱のこと。目前の現象の変化にとらわれない。

〈叙滅〉 — 真理を知ることが迷い(煩惱)を無くす唯一の道であることが解る。

【第二の功德】 ———

(P411・終2行/P300・終4行~)

『則ち能く百千億の義に通達して、無量數劫にも受持する所の法を演説すること能わじ』 (二二頁 終二行)

『数えきれない、仏の全ての教えの内容に通ずる』ことができます。したがって、その人が会得した教えを説こうとするならば、無限の時間を費やしても説き尽くすことが出来ません。

【第三の功德】 ——

(P417・終行/P305・3行～)

『煩惱ありと雖も煩惱なきが如く、生死に出入すれども怖畏の想なけん。～一切の法に於て勇健の想を得ん～能く無上菩提の重き寶を荷い、衆生を擔負して生死の道を出す』 (二三頁 終四行)

自分は悟りきっていないなくても、教えを完全に理解してはいなくても、教えそのものが完全なのですから、決して心配はいらない。一偈を知ったらその一偈を人に伝える。一句を知ったらその一句を人に教える。これが本当の仏の弟子です。仏の道の行者です。常に〈人の幸せ〉を考えるのが仏の教えの神髄だからです。(P434・終4行/P317・終4行)

『未だ自ら度すること能わざれども、已に能く彼を度せん』 (二四頁 一行)

【第四の功德】 ——

(P439・2行/P320・終行～)

『勇健の想を得て、未だ自ら度せずと雖も而も能く他を度せん。諸の菩薩と以て眷屬と爲り、諸佛如來、常に是の人に向つて而も法を演説したまわん』

(二十四頁 終三行)

この教えを一句でも聞けば、悟りを得るためにはどんな困難にも負けない強い心が生じ、そのために自分はまだ悟っていないくとも、他の人を救えるようになります。そしてその人は多くの菩薩の仲間となり、仏がいつもその人に直接に向き合つて、一対一で法を説いてくださいます。

幼い王子が皆からまた讀えられる理由

(P446・5行/P326・終3行)

《**第一の要点**》私たちは「仏性」を先天的に具えているもので、すべてが王子(仏子)。

《**第二の要点**》仏はいつもそばにいて守ってくださり、「仏性」の顕現を助けている。

『已に一切の四衆・八部に宗み仰がれ、諸の大菩薩を以て眷屬とせん。～常に諸佛に護念し慈愛偏に覆われん』 (二五頁 終行)

いつも諸仏から深い慈悲を受け、親が子を守るように手厚く守護される

【第五の功德】 ——

(P450・終4行/P330・2行～)

『是の人復具縛煩惱にして、未だ諸の凡夫の事を遠離すること能わずと雖も、而も能く大菩薩の道を示現し』 (二六頁 六行)

(P455・1行/P333・5行～)

悟りきつてもいなければ大菩薩でもありません。それなのに説く教えが立派なので、大菩薩と同じようなはたらきを現わすことができるというのです。自分にはまだ自信が

あるわけではないけれども、結果がちゃんと自動的に現れてきます。

『一日を演べて以て百劫と爲し、百劫を亦能く^{またよ}促^{ちぢ}めて一日と爲して』 (二六頁 七行)

一日の精進が何万年分の修行に値するでしょう。また何万年分の修行の成果が、その人の一日で悟りを得ることが出来るようになります。

【第六の功德】 ——

(P456・終行/P334・終2行～)

『煩惱生死を遠離し一切の苦を斷ずることを得せしめん』 (二七頁 二行)

その人が煩惱を持つ人であっても、その人が衆生のために法を説くと、多くの人々を煩惱の境遇や、変化に動揺する『凡夫の境地』からすっかり離れさせ、『人生苦』を断ち切らせてあげることが出来るようになります。

【第七の功德】 ——

(P463・2行/P340・1行～)

『未だ六波羅蜜を修行することを得ずと雖も、六波羅蜜自然に在前し、即ち是の身に於て無生法忍を得、生死・煩惱一時に斷壊して、菩薩の第七の地に昇らん』

(二八頁 四行)

自然と『六波羅蜜』を完成したようになります。そして、娑婆世界に生きる生身の人間でありながらも、目の前の現象に引きずられ苦しむことはなくなり、その煩惱を断つことが出来るようになります。さらに菩薩の高い境地を得ることができ、それによって多くの人々と『自他一体』になる境地を得ます。

(P469・6行/P344・8行～)

心の土台がしっかりできておれば、それが(六波羅蜜が)自然に行ないとなって現れるのです。そして<無生法忍>という現象上の変化から超越した境地を得ることができます。そうすれば人生の様々な変化(生死)に動揺する心も、思い悩む迷い(煩惱)も、一時に断ち切れ、うち壊されてしまうのです。(『生死断壊・だんね』します。そして第七地という自他の差別を離れ、全ての人々に対して<一体感>を持つ「遠行地」という境地に至ります。

【第八の功德】 ——

(P473・終3行/P348・3行～)

『敬信すること佛身を視たてまつるが如く等しくして異ることなからしめ…經の威力を以ての故に、其の人の信心を發し歎然として回することを得ん』

(二九頁 二行)

(P455・1行/P349・2行～)

この經典を敬い信じるのが、ちょうど仏さまのお体に対するのと同じく、少しも違うことがないような心持ちにさせる。～教えそのものに大きな力があるために、其の人の信仰心を引き起こし、たちまちにその人の心を、仏道へ振り向けさせることができます。(教えの力が偉大であるために、効果や結果が現われる)

【第九の功德】 ——

(P485・5行/P357・3行～)

『受持し讀誦し書寫し供養し、廣く衆人の爲に是の經の義を分別し解説せん者は、即ち宿業の餘罪重障、一時に滅盡することを得～善く分身散體して十方の國土に遍じ、～極苦の衆生を拔濟して悉く解脱せしめん』
(三十頁 四行)

(P486・4行/P357・終2行～)

受持・讀誦など五種法師の行をし、真心の感謝の供養をし、広く人々のためにこの教えの内容を、それぞれの人に理解できるようにかみ砕いて解説する人は、輪廻を繰り返して過去世からの悪業や、今世での善業で償いきれなかった罪や重い障りも、たちまちに滅し尽くすことができ、そのまま清らかになることができます。

《急い惟のひととき ⑦》

『受持し讀誦し書寫し供養し、廣く衆人の爲に是の經の義を分別し解説せん者は、即ち宿業の餘罪重障、一時に滅盡することを得』

—— 「自体一体」となることの大切さを説いている『無量義經』の教えを深く理解し、その教えを受け止め、実践して行くならば、『宿業・余罪重障』が一瞬にして消えるというこの經文を、あなたはどうか受け止めますか？

※ 分身散體(ふんじんさんたい) —— 第一は～ ある人が仏・菩薩の身代わりとしか思えないようなはたらきをすることです。信仰者であれば、生涯に一度や二度は実感することができることで、～ 第二は、～ 現実的に、生きた人間の感化が、多くの生きた人間に及ぼされ、それが次第にひろげられてゆくという形、第三は、～ 書物その他が身代わりをつとめる。(身代わりになって人をお救いするような人が現れたり、自分が記した文書などが自分の身代わりになって人を導くようになった) (P495・3行/P364・1行)

《急い惟のひととき ⑧》

『分身散體して十方の國土に遍じ』

—— 自分の代わりとなって人をお救いする人、またはその手助けをしてくれる人が現れるという『分身散體』を、あなたはどのように受け止めますか？
考えてみましょう。

【第十の功德】 ——

(P500・5行/P368・3行～)

『自然に初めの時に能く無數阿僧祇の弘誓大願を發し、深く能く一切衆生を救わんことを發し、大悲を成就し…一切を安樂し、漸見超登して法雲地に住せん。恩澤普く潤し慈被すること外なく、苦の衆生を攝して道跡に入らしめん。是の故に此の人は、久しからずして阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得ん』(三一頁 六行)

自然と仏道についての多くの願を起し〈四弘誓願〉……次第に高まってついには菩薩の十地である〈法雲地〉一切の人々を救える境地を得、人々を釈尊の足跡に導けます。そして長い年月を経ずに仏の悟りを成就できます。(P500・終2行/P368・5行～)

しぐ せいがん 四弘誓願

(P501・3行/P368・終3行)

- 「衆生無辺誓願度」—衆生の数は無辺（無限）であっても、必ず一切を救う誓願。
- 「煩惱無数誓願断」—煩惱の数は無数であっても、必ず断ち切る誓願。
- 「法門無尽誓願学」—仏の教えは尽きることはなくても、必ず学び尽くす誓願。
- 「仏道無上誓願成」—仏の道（悟り）はこの上無いものだから、必ず成就する誓願。

しがい 《怠惰のひととき ⑨》

「四弘誓願」の中で、私はどの「誓い」を持っているか？ または、どれを「誓い」としたいか？ 考えてみましょう。

しょうじゆ しゃくぶく 摂受と折伏

(P506・終5行/P373・1行)

- 「摂受」— 相手を自分の胸に柔かに抱き取り（受入れ）、養育するように説く教化法。
- 「折伏」— 相手が悪知恵・五逆罪・謗法の人の時、相手を全否定して打ち下す教化法。

※どちらも仏道に導き入れる手段ですが、お釈迦さまの事跡を拝しますと、仏教の性格としては、やはり〈摂受〉が本筋（表）です。

あふ 釈尊のみ跡を

(P508・6行/P374・2行)

われわれはお釈迦さまの歩まれた足跡を踏んで行けば、人生の旅に迷うことは絶対にありません。ここが、現身の釈迦牟尼世尊を教主にいただく仏教の有難いところです。人を導くにも、お釈迦さまの歩まれた足跡のところへ連れて行ってあげればいわけです。 ⇒ 《教会勧請本尊・本尊勧請の大切さ》

しょう ほん 聖と凡のちがい

(P511・6行/P376・8行)

この〈聖〉と〈凡〉とはどう違うかといいますと、

- 「凡」— 煩惱のために、人生のいろいろな変化に心を動揺させる境界。
(てっとり早くいえば、境遇に心を引きずりまわされる境界)
- 「聖」— 煩惱を離れたために、現象の変化に心を動かされなくなった境界。
(てっとり早くいえば、境遇に心を引きずられなくなった境界)

『能く諸の凡夫をして皆聖果を成じ、永く生死を離れて皆自在なることを得せしめたもう。…凡夫地に於て諸の菩薩の無量の道牙を生起せしめ、功德の樹をして鬱茂扶蔬増長せしめたもう』 (三二頁 二行)

菩薩に芽をださせるには

(P512・5行/P377・4行)

植物の発芽には適度な「湿り気」と「熱」が必要なように、仏心・菩薩心の芽を生起させるには、やはり教えによっての心の潤いと温かみ、つまり「慈悲」が必要です。

仏恩に報いるには

(P521・1行/P383・終4行)

ご恩に報いる道は、第一にその教えを「どこまでも守ってゆく」こと。第二にその教えによって「人を導き救う」こと。この二つに尽きます。中でも第二は特に大切です。

無量義経のまとめ

(P534・7行/P395・6行)

「現実の上では差別があるように見えても、その本質においてはみな平等なのだ」と、全ての物事の実相を正しく捉えなさいということです。現実の様々な現象にとらわれているからこそ、苦しみや悩みが限りなく起ってくるのであって、このように〈諸法の実相〉を正しく捉えたならば、全ては仏の広大無辺な大慈悲心に発したものであることが解り、仏の大慈悲心に感応したときに、本当の心の安らぎを得、本当の幸福を得ることができるといなのです。

《愚惟のふいかえり まとめ》

今日の『十功德品第三』を通して、何を学び取られましたか？ そして「何を実践・実行しよう」と思われましたか？ 振り返ってみましょう。（何を一番印象深く感じ、受け止めることができましたか？ また、具体的に何を実践しようと思いましたか？）

以 上